

# 「おくのほそ道」に採択されなかつた旅中吟についての覚え書き

——芭蕉の紀行文制作意識にふれて——

宇和川 匠 助

「おくのほそ道」の記事は、紀行文の性質上、芭蕉らの経過地の順序にアレンヂされていることはいうまでもない。しかしこれらの記事の選択は、これまでにあつた紀行文のように「其日は雨降(り)、晝より晴(れ)て、そこに松有、かしこに何と云(ふ)川流れたり」(後文)などという、誰でもが書く紀行文ではなく、「酔(へ)ル者の慄語」や「いねる人の謔言」のような、主観的、創作紀行文を制作しようとする作者の意図によつて統一・配列されたものである。

それでは芭蕉が主観的・重点的にとりあげた旅中の記事は何であつたかという点、それは単なる自然の風景ではなく、その自然に古人の心のしみついた歌枕であり、神社・仏閣であり、古墳・古碑などの歴史的文化現象であり、また現実の人事現象にしても、彼の好みに適合した、旅行中、印象に残つたひとびとのことであつた。

そしてそれらのひとびとは、「わづかに風雅ある人に出合たる、悦びかぎりなき」ひとびとで、「はにふ・むぐらのうち」、「瓦石のうち」、「泥中に金得たる心地して、物にも書付、人にもかたらくとおもふ」(後文) おおむね名もなき庶民階級に属するひとたちで

「おくのほそ道」に採択されなかつた旅中吟についての覚え書き

——芭蕉の紀行文制作意識にふれて——

あつた。彼のながめた自然、彼と関係をもつた人間は、常に彼の人生観、文学観の投影した主観的自然であり、主観の人間であつたといふことができる。

そこに彼の紀行文の素材選択の基本的態度を見いだすのである。

芭蕉はこれらの素材に対して、強い感動を覚えると、発句として詠じた。そしてそれら旅中の発句は、随行者、曾良に命じて書きとゞめさせたり、芭蕉自身も、「夜は草の枕を求(め)て、晝のうち思ひまうけたるけしき、むすび捨(て)たる発句など、矢立取出て、灯の下にめをとち頭たゞきてうめき伏」(更科)しながら、苦吟の結果になる句を備忘のために、書き残したのである。

芭蕉は後年、「おくのほそ道」を制作するとき、句作備忘録を第一資料として、旅の記憶をあれこれとたどりながら執筆したのと思われる。彼の句作備忘録には、随所で詠んだ発句に、発想の場を説明する心覚えのための短い詞書きが添えられていたことも想像にかたくない。

芭蕉はまずそれら旅中の既成句を精選し、それを経過地の順序に

配置するとともに、それら発句を核として、地の文を書き進めたものと推定される。したがって最初に精選されたいくつかの既成句が原則として存在したわけである。

しかし特例として、紀行制作の過程で、前後の連結のために、ぜひ必要であったり、当時を回想して興にのり、新たに作句したり、また旅中あいつ句として作ったものを、紀行の地の文に適合するように変更することもあった。これは彼が、風交のため興業した連句の発句と、紀行文に載り入れる発句とのあいだに区別意識をもっていたことを示すものである。

ところで紀行作品の成功・不成功の鍵は、旅中吟の配列にあったと思われる。このことは大にしては、全体構成からみて、首尾が一貫しているかどうか、内容が変化に富んでいるかどうかということと深い関係をもつことであつたし、小にしては発句を核とする小段落において、句・文が映発しあつて相互の表現価値を高めているかどうかということも密接にむすびつくことであつた。

次に句・文からなる紀行の文に問題を移して考えてみると、文にはめこむときの句の前文は、慶弔・相聞などの短い前書きでは、句を中心とした小段落と小段落との連結がふじゅうぶんになるので、どうしても文が長文化する可能性が強くなる。

前文があつて、一句を終末にすえるのが基本形式であるが、この形式がくずれて、句をはさんで、次の段落に結びつける小文が必要になったり、あるばあいには、もともと句をひきたるためになつた前文が長大化して、核となるべき句をとまわらないことにもなつた。また同一素材を詠んだ複数句を、作者としての愛惜の情から

か、取捨を怠つて複数句をそのまま並記して、句に映発すべき文が欠落することもある。

このように構成上多少の瑕瑾はあるにしても、作者は基礎素材としての発句の精選と配置、句を中心とする地の文の構成などによつて、一所不住、人生即旅の主題を綜合・統一して、この紀行に盛りこもうと意図したことは疑いのないことである。

「ほそ道」の道中吟で、紀行に採択されている作品は、△草の戸も住替る代ぞひなの家▽にはじまり、△蛤のふたみにわれ行(く)秋ぞ▽で終る、ちょうど五十句であるが、これら以外に「曾良旅日記」「俳諧書留」「荊口句帳」「雪まろげ」などによつて知られる「ほそ道」に採択されない作品があつて、それらが採択句とほぼ同数に近い。

わたくしはこの不採用の旅中吟を、「ほそ道」の句・文との関係において検討することが、芭蕉の紀行文制作の意識を追及するうえに、何らかの示唆をあたえるものでありはしないかと考えた。そこでさしあたり既刊の権威ある文献を参照して、「ほそ道」旅中の作と思われる作品をとらえ、わたくしなりの臆断を加え、覚え書きを作ってみることにした。

(注一) 「曾良に語れば、書きとゞめ侍る」市振の条。また「俳諧書留」には、旅中の歌仙・発句などが、忠実に書きとゞめられている。

(注二) △行く春や鳥啼(き)魚の目は泪▽是を矢立の初として(ほそ道)

(注三)

△五月雨を集めて涼し最上川▽を△五月雨を集めて早し最上川▽。△有難や雪をかほらす風の音▽を△有難や雪をかほらす南谷▽。△涼しさや海に入たる最上川▽を△暑き日を海にいれたり最上川▽。△隠家やめにたたぬ花を軒の栗▽を△世の人の見付ぬ花や軒の栗▽。

△涼しさや▽を△早し▽に変改したのは、もつとも顕著な例であるが、南谷の句にしても、暑き日をの句にしても、あいさつの季節的対詠性を捨象して、紀行文中の句とし、読者への鑑賞を配慮している点がみられる。あいさつ句を紀行の本文に採択するのは、紀行後半に多く、これは前半に注いだ紀行構成のエネルギーの、減衰を示すものであるとも思われる。

鮎の子の白魚送る別裁

(統獲)

「芭蕉翁句集草稿」に、「此句、松島旅立の比、送りける人に云出待れども、位あしく仕かへ待ると、直に聞えし句也」とある。土芳の記述であるから信頼性がある。送る人と送られる人との対比が露骨であるので、「ほそ道」執筆の時に、△行春や鳥啼き魚の目は泪▽と想を改めたのであらう。改作句では逝春の情を別離の感情にだぶらせて、鳥と魚の対比をほとんど意識させない。

またこの句が「ほそ道」執筆時の作であることは、この句と首尾の関係にある△蛤のふたみにわかれ行秋ぞ▽の、△行春▽と△行秋▽とを意識的に照応させた点からみても、うかがい知られることである。

「おくのほそ道」に採択されなかった旅中吟についての覚え書き

糸遊に結(び) つきたる煙哉

(曾良)

「室八嶋」のことばがきがある。紀行には「室八嶋」の文のみがあつて、核となるべき句を欠く。紀行本文に「煙を読習(は)し侍るもこの謂也」と書いているし、わざわざ迂回して、煙にちなむ歌枕の地を訪れたのであるから、文末に一句ありたいところである。すえるとすれば、曾良が縁起を語り終る文末である。そうすることによって、幻想的雰囲気をかもしだす効果をねらうこともできたかも知れない。だが芭蕉はこの句を捨てた。△結びつきたる▽の技巧的表現をきらったのかも知れない。

入(り) かゝる日も糸ゆふの名残かな

(初旅)

曾良の「書留」には、△入(り)かゝる日も程々に春のくれ▽とあり、△糸遊の名残▽が見せ消ちになつてゐる。これは糸遊の句で、「室八嶋」の歌枕の煙とは、はなれてゐるので、もちろん採らなかつた。

鐘つかぬ里は何をか春の暮

(曾良)

田家に春のくれをわぶ

入(り) あひのかねもきこへ(え) ずはるのくれ

(曾良)

同想別案と思われるこの二句は、室の八嶋に到る道か、あるいは八嶋を出発してからの路上吟であつて、紀行、八嶋の記事とは遊離している。したがって採択せず。

芭蕉の紀行文制作意識にふれて

時鳥うらみの滝のうら表

(雪まろげ)

「やどりの松」に、「日光山に上り、うらみの滝にて」と前書きがある。紀行にある八暫時は滝に籠るや夏の初と、同時作であろうが、芭蕉は八暫時はVを探り、この句を捨てた。技巧的な作品に對する自己評価によること、もちろんであるが、地の文に對して核となるべき一句をすえるという原則から考えてもとうぜん捨てるべき句であった。

秣負ふ人を枝折の夏野哉

(曾良書留)

「曾良書留」には、「翠桃を尋(ね)て」とあり、亭主、翠桃の八青き覆盆子(を)こぼす椎の葉Vと脇句をともなつたあいさつ句である。「陸奥衛」には、「陸奥にくだらんとして、下野国まで旅立けるに、那須の黒羽と云(ふ)所に翠桃何某の住(み)けるを尋(ね)て、深き野を分け入る程、道もまがふばかり草ふかければ」と前書きがある。広大な那須野の景がいかにもリアルに形象されている。ところが芭蕉は、別に草刈のおこの小娘、「かさね」と、野飼いの馬などを素材としてロマンチックな一文を構成し、文末を八かさねとは八重撫子の名成るべしVという曾良作の句で結び、前述写実的な前書きをともなつた八秣負うVの文と句を捨てている。わたくしはこゝにリアリストであるよりはローマン的傾向の強い作者を想像する。またこのところはいかにも文のために句を作つて、文末にすえたという印象を与える。文が主で句が従なのである。おそらく芭蕉は、「ほそ道」執筆の時に、「秣負う」の備忘録があり

ながら、これを捨て、新たに文を主とする一文を作つたものと思われる。そう考えると八かさねとはVの曾良作は、芭蕉の代作かも知れない。かさねという小娘の名のもつイメージが、彼にロマンチックな一文を草さしめたということになる。

山も庭にうごきいる、や夏ざしき

(曾良書留)

「秋鴉主人の佳景に對す」と、前書きがある。「ほそ道」本文の「黒羽の館代浄法寺何がしの方に音信る」に對応している。翠桃の兄、浄法寺図書高勝の館に招待された時のあいさつ句である。この句は前記八秣負うVの作とともに独立句として、じゅうぶん鑑賞に値する佳句であるが、芭蕉は雨に降りこめられて約十四日間滞在した、黒羽での雑然とした記事を整理して効果的に配置するために、わずかに八木啄も庵はやぶらず夏木立V八夏山に足駄を拝む首途哉Vの二句を採択するにとどめた。芭蕉は旅中多くの歌仙を巻いているが、あいさつ性の強い歌仙の発句は、紀行に採るばあいそのあいさつ性を除去する配慮をはらっている。これはあいさつ句をそのまゝ旅の順序に羅列することが、紀行をマンネリ化させることを知っていたためで、「ほそ道」の前半では、あいさつ句をとりあげることが少い。後半には構成力の減衰を思わせるように、前書き程度の短い前文をともなつたあいさつ句を安易に並記することが多くなっている。

「書留」をみると、この八山も庭にVの句には、長い後書きがついていて、浄法寺図書の館をとりまく自然が、詳細に描写されている。すなわち、「浄法寺図書何がしは那須の郡、黒羽のみたちをも

のし預り待りて、其私の住みける方もつきくしういやしからず。地は山の頂にさへて、亭は東南にむかひて立(て)り。奇峯乱山かたちをあらそい、一髮寸碧絵にかきたるやうになん。水の音、鳥の聲、松杉のみどりもこまやかに、美景たくみを盡す。造化の功のおほひなる事、またたのしからずや。」である。これを前文にして、八山も庭にVの句をすえれば、そのまゝ、「ほそ道」の本文とすることも可能であるが、前述のように、雲岸寺の仏頂和尚のことを重点的にとりあげて書き、惜しげもなくこの句、この文を捨てた。

田や麦や中にも夏(の)時鳥

(曾良)

「俳諧書留」には、「しら川の関やいづことおもふにも、先、秋風の心にうごきて、苗みどりにむぎあからみて、粒くからきめをする賤がしわざもめにちかく、すべて春秋のあはれ・月雪のながめより、この時はや卯月のはじめになん待れば、百景一つをだに見ることあたはず、ただ聲をのみて黙して筆を捨(つ)るのみなりけらし。」の前文がある。

奥州の関門、白河の関を前にしながら、雨に降りこめられて黒羽に滞在していた時にできた作と思われる。「ほそ道」での名文の一つ、白河の関越えの文章の序曲をなす句・文であつて、能因をはじめ、文学伝統のゆたかな白河の関にあこがれる気持が独白されている。紀行には掲載されなかつたが、白河の関越えの文の潜在力を藏している。

鶴鳴(く)や其声に芭蕉やれぬべし

(曾良)

「おくのほそ道」に採択されなかつた旅中吟についての覚え書き

「ばせをに鶴絵かけるに」とあるように、面贊の句で「ほそ道」とは遊離している。したがつて省畧。

落ちくるやたかくの宿の郭公

(曾良)

「書留」によれば「高久角左衛門ニ授(ク)ル」とあつて、「みちのく一見の桑門、同行二人、なすの篠原を尋(ね)て、猶、殺生石みんと急(ぎ)待るほどに、あめ降り出ければ、先、此處にとまり候」と謡曲じたての前文があり、曾良が八木の間をのぞく短夜の雨Vと、脇をつけている。

「ほそ道」の「殺生石は温泉の出る山陰にあり」という文の前に位置すべきであるが省畧。これは黒羽関係の記事を八野を横に馬牽(き)むけよほとぎすVの句で、結末をつけたのでそれ以上の煩雑を避けたことと、この句・文が角左衛門へのあいさつであつたことも省畧の理由となつたかもしれない。

湯をむすぶ誓も同じ石清水

(曾良)

「日記」に、「温泉大明神ノ相殿ニ八幡宮ヲ移シ奉(リ)テ雨(雨)神一所(方)ニ拜(マ)レサセ玉フヲ」とあり、この句がある。「ほそ道」には、「それより八幡宮に詣。與市、扇の的を射し時、別しては我国氏神正八まんとちかひしも、此神社にて侍(る)と聞(け)ば、感應しきりに覚えらる」とあり、黒羽の金丸八幡参詣のところ、与市のことを書いてしまったので、温泉神社、相殿の八幡宮の記述、およびこの句は省畧せねばならなかつた。句としても技巧に過ぎる。

芭蕉の紀行文制作意識にふれて

石の香や夏草赤く露あつし

(曾良  
旅日記)

「日記」に「殺生石」とことばがきがある。この句は写実的・感  
覚的で捨てがたい作である。「ほそ道」の「殺生石は温泉の出(づ)  
る山陰にあり。石の毒気いまだほろびず。蜂蝶のたぐひ、真砂の色  
の見えぬほど、かきなり死す」。とある文の次に、この句をすえる  
と効果的だと思うが、芭蕉はこれを捨てた。

「ほそ道」のこのあたりの文の構成上、この句を挿入する余地がな  
かったためとも思われるが、一つには殺生石の伝説的興味よりも、  
次の西行にまつわる歌枕の遊行柳に重点をおいて読ませる意図があ  
ったのかも知れない。

早苗にも我(が)色黒き日教哉

(曾良  
書留)

西か東か先(づ)早苗にも風の音

(曾良  
書留)

「書留」に「みちのくの名所く、こころにおもひこめて、先、  
せき屋の跡なつかしきまゝに、ふる道にかゝり、いまの白河もこえ  
ぬ」とあって、△早苗にも√の句があり、次に改行して、「岩瀬の  
郡、すか川の駅に至れば、乍単斎等射子を尋(ね)て、かの陽関を  
出て故人に逢(える)なるべし」とつゞき、「発句前二有」とあ  
る。前にある発句とは、「ほそ道」の△風流の初やおくの田植歌√  
である。

「葱摺」には、「みちのくの名所く、心におもひこめて、先(づ)  
関屋の跡なつかしきまゝに、ふるみちにかゝりて、いまのしら河も  
越えぬ。頓(が)ていはせの郡にいたりて、乍単斎等射子の芳扉を

扣(く)。彼(の)陽関を出(で)て故人に逢(える)なるべし」  
とあって△風流のはじめや√の句がある。

「ほそ道」の本文と対照すると、「曾良書留」と「葱摺」の両書  
にある「いまのしら河も越えぬ」が、「とかくして越(え)行(く  
ま)に」となり、この間に、あたりの山岳を中心に述べた地形の説  
明が入り、かげ沼のことが簡潔に挿入されて、「すか川の駅に等射  
というものを尋(ね)て」とつゞき、△風流の初や√の句でしめく  
くつてある。

したがって「曾良書留」の文が初案、「葱摺」の文が再案ではな  
いかと推定される。

白河の関越えで、芭蕉にもっとも強い感動を与え、発句に文に、  
その発想の中心をなしているのは、能因の△都をばかすみとも  
立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関であった。芭蕉はそれを文にして  
は、「秋風を耳に残し」と書き、発句にしては、「日教かな√と詠  
じ、推敲して△風の音√とした。

したがって白河の関越えの文は初稿・再稿の段階では、△西か東  
か√の句を裁ち入れた「書留」の文か、あるいは、再案の「葱摺」  
の文でもよかったであろうが、旅行後、彫琢を加えた白河の関越  
えの文が完成してみると、「長途のくるしみ、身心つかれ、且は風  
景に魂うばわれ、懐旧に腸を断(ち)て、はかしくしう思ひめぐら  
さず」と書いたてまえ、「書留」や「葱摺」にあるような、自作を  
文末にかゝげることではできなかった。そこで白河越えの文末には、  
曾良の△卯の花をかざしに関の晴衣かな√の句をおかざるを得な  
かったとも思われる。

芭蕉は吉野や松島に自作を示さなかったと同様に、白河の関でも自作を積極的に示そうとはしていない。

関守の宿を水鶏にとはふもの

(曾良書留)

「白河、何云へ」とある消息句で、紀行本文と直接の関係がない。とうぜん省略。

五月雨は滝降(り)うづむみかさ哉

(曾良書留)

「書留」に「須か川の駅より二里ばかりに、石河の滝といふあるよし」云々とあり、医師等雲への書翰に書き添えたあいさつ句である。須賀川滞在中の作ではあるが、八風流の初や八世の人のVの等躬・可伸の両人物を背景にしたあいさつ句があつてみれば、この句を挿入する余地のないことは明白である。

嶋ぐや干々にくたけて夏の海

(蕉翁文集)

芭蕉は松島では、曾良作八松島や鶴に身をかれほととぎすVを文末において、「予は口をとぢて眠らんとしていねられず」云々と書いている。美景に感動して、「富士吉野の句一生なし」という彼の常語意識にしたがつて処理されている。たゞし富士・吉野を正面からとりあげていないが、富士・吉野の句のあることは周知のとおりである。

松島の文は旅行後にそうとう想を練って作文せられたものであることは、こゝにかくげた句の前文が初案らしい面影を残していること

「おくのほそ道」に採択されなかった旅中吟についての覚え書き

とによつてもたしかめられる。前文を引用すれば、「松島は好風扶桑第一の景とかや。古今の人の風情、此嶋にのみ思ひよせて、心を尽したくみをめぐらす。をよそ海のよも三里斗にて、さまぐの嶋ぐ、奇曲天工の妙を刻みなせるがごとし。おのぐまつ生茂りて、うるわしき花やかさ、いはむかたなし」とあつて、「ほそ道」本文の原型をとどめている。「風俗文選」にある松嶋賦は、「ほそ道」の末の松山・塩釜・松島・瑞巖寺の文をまとめて一つにしたものであつて、前記「蕉翁文集」の前文を初案とすれば、「風俗文選」の文章は、「ほそ道」本文に行きつく中間稿とも考えられる。

螢火の屋は消(え)つゝ柱かな

(曾良本奥の細道)

「曾良本」によると、八五月雨の降(り)のこしてや光堂」の左脇に、この句が記してあつて、棒を引いて消してある。

井本農一博士の「曾良本おくのほそ道による奥の細道の考察」によると、螢火の句は曾良本と河西本に見えるのみで、しかも両書ともに消しているのだから、芭蕉の意を汲んで抹殺すべきではあるが、なほ芭蕉研究上、参考資料を提供するものである。光堂のらでんをはじめこんだ巻柱を詠んだ句であることはいうまでもないところである。わたくしも同感で、光堂の内部にさしこんだ、幽かな光線の中にある、善美をこらしたらでんの巻柱に屋の螢を配して、夢幻的な雰囲気をもたせようとした点、いかにも芭蕉らしい作であると思ふが、芭蕉はこれを捨てた。そして八五月雨の降のこしてや光堂Vの一句を重点的に文末にすえることによつて、光堂の印象を分散させることを恐れた、一句一文の原則を守っているものといえよう。

芭蕉の紀行文制作意識にふれて

ちなみに、△五月雨のVの句の初案が、△五月雨や年／＼降(り)て五百たびVであることも、「曾良本おくのほそ道」によって知ることが出来る。

水の奥水室尋(ぬ)る柳哉

(曾良) 書留

風の香も南に近し最上川

(曾良) 書留

前者は風流亭にて、後者は盛信亭にてとあり、ともにあいさつ句で紀行に採られていない。△五月雨をあつめて早し最上川Vが最上川下りを叙する文末にすえられているが、「書留」に「大石田高野平右衛門亭ニテ」とあるように、もとはあいさつ句であつて、その意味では「水の奥」「風の音」の両句と同列のものであるが、芭蕉は最上川下りの文を書くにあたって、△集めて涼しVを△集めて早しVとすることによって、あいさつ句を、最上川を下った体験句として文末にすえ、文と句の効果をあげている。

其玉や羽黒にかへす法の月

(真蹟) 懐紙

月か花かとへど四睡の軒哉

(真蹟) 画賛

「其玉や」は、長文の「遠流の天有法印を悼む」前文があつて、末文にすえられた句である。「門徒等しきりにすゝめらるゝによりて、をろ／＼戯言一句つらねて香の後に手向(け)待る。いと憚(り)多(き)事になん侍る」と文を結んだ、そのあとにこの句があるのが追悼句である。「ほそ道」の文中に挿入するとすれば、羽黒権現の縁起を記した「……修験行法を励(ま)し、靈山靈地の験

効、人貴(び)且恐る。繁栄長(なえ)にしてめで度(き)御山と謂(ひ)つべし」のあとにこの句をおき、縁起の文中に権現中興の祖、天有法印のことを加えるべきであるが、芭蕉はその煩雑をさらした。「月か花か」の作は、この句と同時にできたもので、天有法印の描いた四睡の図の画賛である。「其玉や」をはぶいたとおなじ理由でこの句も採用しなかつた。

めづらしや山をいで羽の初茄子

(曾良) 書留

鶴岡、重行亭でのあいさつ句。「ほそ道」本文に「羽黒を立(ち)て、鶴が岡の城下、長山氏重行と云(ふ)物のふの家にはむかへられて、俳諧一巻有」。の次におかれるべき句であるが省略。

これは洩庵不玉亭での△あつみ山や吹浦かけて夕すゞみVおよび酒田安種亭での△涼しさや海に入たる最上川V、(本文に入れるとき△涼しさやVを△暑き日をVに改作)の二つのあいさつ句を採用した以上、おなじあいさつ句をさらに一句加えることは、冗漫であるとの配慮と、川と海の涼をまとめて二句としたので、季語の異なる「初茄子」の句は捨てたものと思われる。なほ玉志亭での、

初真桑四(つ)にや断ン輪に切ン

(真蹟) 懐紙

のあいさつ句を削ったのも、これと同じ理由による。

一文の終りに、二句を並記することが、すでに句文の緊密性を破るものである以上、本文に採った二句以外に、さらにへめづらしやV△初真桑Vのあいさつ句を加え、四句とするようなことは、とうぜん避けるべきことであつた。

夕晴や桜に涼む浪の花

(俳諧)

真蹟懷紙に「夕方雨やみて、処の何がし、舟にて江の中を案内せらるゝ」とあるので、「ほそ道」を執筆するとき、この句のメモがあったことはまちがいない。

「ほそ道」本文の「むかふの岸に舟をあがれば、花の上ごとぐよまれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす」に関連をもつ句である。

しかし象瀉の文末には、△象瀉や雨に西施がねぶの花▽の一句があればそれでよいのである。紀行本文の「東に堤を築(き)て、秋田にかよふ道逢(か)に、海北にかまえて浪打(ち)入る(る)所を汐ごしと云」に対応する△汐越や鶴はぎぬれて海涼し▽の句も蛇足の感さえする。まして同じ涼しの句、「夕晴や」をおく余地はまったくなかった。しかし西行に傾倒する芭蕉は、これを地の文に生かしたのである。

象瀉の文末に、曾良の△象瀉や料理何くふ▽△波こえぬ契▽の二句と、低耳の△蟹の家や▽の三句を安易に文末にならべたことは、蛇足であつて、このことはこのあとにつづく△荒海や佐渡によこたふ天河▽と、句のみかゝげて前文、たとえば「銀河の賦」のような文をともしなわぬことなど、「この間九日、暑湿の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず」と言いわけめたことばを記してはいるが、どこか構成力の減衰を感じさせるものがある。

小鯛さす柳涼しや海土がつま

(曾良)

「おくのほそ道」に採択されなかつた旅中吟についての覚え書き

「西浜」とあつて、直江津以西の海岸での曠目吟と思われるが、これは紀行本文にとりあげるほどのことはなかつた。

葉欄にいづれの花をくさ枕

(曾良)

「細川春庵亭ニテ」とあるあいさつ句。「ほそ道」の「……暑湿の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず」の大省略の部分にはいる作品である。風徳の「芭蕉文集追記」にあるこの句の前文、「みちのく出羽の名処くをみめぐりて、猶北海の荒磯を伝ひ、高すなごあゆみ苦しき越の長途に、多病いとなつたかだといふ処にいたる。此境に良医棟雪何某とかや、風雅のきこえ遠く伝(え)たるをたづね入(り)て」は、「ほそ道」の本文と符節を合わせた記述である。

熊坂がゆかりやいつの玉まつり

(笈)

加賀生れの大盜・熊坂長範をむらつた句であるが、加賀国の記事は、△わせの香や▽の作でまとめたので、この句はとうぜん省略。

ぬれて行(く)や人もおかしき雨の萩

(曾良)

「廿六日、同歡水亭会、雨中也」とある。同とあるのは紀行に採択された△しほらしき名や▽の句の前書、小松山王会とある、小松での吟であることを意味している。

金沢の文末には、△塚も動け▽があればよいのであるが、△秋涼し手毎に▽のあいさつ句、途中吟△あかあかと▽の作、さらに△し

—芭蕉の紀行文制作意識にふれて—

ほらしき名やVというように、文をとまなわぬ句が、孤立的に唐突に掲出されて、句のすえかたとして芭蕉らしくない。このハぬれて行(く)やVの句を探るとすれば、本文のハしほらしやVの次に位置するのであるが、その煩雑をきらって削除したと思われる。

桃の木其葉ちらすな秋の風

(集) 泊船

いさり火にかじかや波の下むせび

(集) 卯辰

ハ桃の木のVは、本文の「あるじとする物は、久米之助とて、いまだ小童也」とある次におくべき句であるが、ここに入れると久米之助の父の風雅をいうのに支障があるので削った。

ハいさり火にVの句は、「山中十景、高瀬漁火」とあって、山中温泉滞在中のものであるがすでに山中温泉の句・文があれば、この句挿入の余地はない。

湯の名残今宵は肌の寒からむ

(集) 祚原

久米之助との惜別のあいさつ句。紀行の「今更むかし語(り)とはなりぬ」の次にこの句をおけないこともないが、次の段の曽良との別離に重点をおく以上、別離の句の重複を嫌うのはとうぜん。また山中温泉の段は、貞室と久米之助の父との話であるから、久米之助との惜別句の占める位置がなかったともいえる。

名月の見所問はん旅寝せむ

(前) 句帳

「福井洞裁子をさそふ」とことばがきがある。福井の等裁訪問の

文末に、この句をすえたいところである。「……名月はつるがのみなどにとたび立。等裁も共に送らんと、裾おかしうからげて、路の枝折とうかれ立。」という紀行の文脈にぴったりする句であるが、なぜこの句を探らなかつたのであろうか。「荊口句帳」の「芭蕉翁月一夜十五句」の望月吟は、この福井の文以降、種の浜にいたるまで、常に本文の背景となっている。芭蕉が、月一夜十五句をふまえて、「ほそ道」のこのあたりの文を構成したことはあきらかである。

月見せよ玉江の蘆を苅らぬ先 金江

(前) 句帳

あさむつを月見の旅の明(け) 離れ(阿曾武津の橋)

(前) 句帳

あすの月雨占なはんひなが嶽(ひなが嶽)

(前) 句帳

月に名を包みかねてやいもの神(湯尾)

(前) 句帳

義仲の寝覚の山か月悲し(鑿が越)

(前) 句帳

中山や越路も月はまた命(越の中)

(前) 句帳

国々々の八景更に気比の月(気比の海)

(前) 句帳

ふるき名の角賀や恋し秋の月

(前) 句帳

この八句は、紀行本文の「漸、白根が嶽かくれて比那が嵩(岳)あらはる。あさむつを橋をわたって、玉江の蘆は穂に出(で)にけり。鶯の関を過(ぎ)て、湯尾峠を越(ゆ)れば、鑿が城、かへるやまにて、初雁を聞(き)て、十四日の夕ぐれ、つるがの津に宿をもとむ。」の文中に織りなされている。「あさむつ」「玉江の蘆」は、ともに歌枕であるから、芭蕉が見のがすはずはなく、「いもの

神」は、伝説として著名、鑿山は湯ノ尾の向い山で、芭蕉が特に愛した悲劇の英雄、木曾義仲の居城であつてみれば、無関心に通過することは、できなかったであろう。これらの句は、紀行に採択するとすれば、その位置は紀行の文末に位置すべきであろう。しかるに芭蕉は、敦賀での文は、氣比神宮に重点をおいて書き、文末に、八月清し遊行のもてる砂の上Vをすえた以上、これら八月を掲出する余地はなかつた。わずかに道行文によつて、句に詠じたような、歌枕や歴史・伝説などに対する関心を、文のしたじきとすることにとどめたのである。

月のみか雨に相撲もなかりけり

(荆口句帳)

月いづく鐘はしづめる海の底

(荆口句帳)

紀行には「十五日、亭主の詞にたがはず、雨降る。」とあり、次に八月月や北国日和定(め)なきVの句をすえている。この句は、敦賀のことを叙した文の前の方にある「十四日の夕ぐれ、つるがの津に宿をもとむ。その夜、月殊に晴れたり。あすの夜もかくあるべきにやといへば、越路の習ひ、猶明夜の陰晴はかりがたし」と、ある文をうけた句としておかれている。だから八月のみかV八月いづくVの両句の位置としては、八月月や北国日和Vの句の次に位置するのであるが、二句ともに捨てた。

八月のみか雨に相撲Vの句の省略は、八月月や北国日和Vの句が採られれば不必要である。しかし八月いづく鐘はVの句は、荆口句帳にあるこの句の前文に「おなじ夜あるじの物語に、此海に釣鐘のしづみて待るを、国ノ守の海士を入(れ)てたづねさせ給へど、龍

「おくのほそ道」に採択されなかつた旅中吟についての覚え書き

頭のさかさまに落入(り)て、引あぐべき便もなしと聞(き)て」という文があつて、鐘ヶ崎の沈鐘伝説に発想している作である。ロマンチックな素材を一文としたところである。しかし芭蕉は、「ほそ道」のこころあたりの文では、十四日、十五日、十六日というように日記風の敘述をとっている関係上、この句を核とする一文を構想することを断念したのであろう。

芭蕉がこの作を紀行に生かしたいとの思いは、桂下園東恕撰の「俳諧四幅対」に、八月月や北国日和Vの句の次に、「同じ夜、主の物語、」として「荆口句帳」にあるような一文を草し、そのあとに八月いづくVの句をすえていることによつてもうかがい知られる。

小萩られますほの小貝小盃

(鷹獅子集)

衣着て小貝捨はんいろの月

(荆口句帳)

八月小萩られVの句は、紀行の「其日のあらし、等裁に筆をとらせて寺に残す」とある懐紙の文末にしろされた句であつて、本文に採るとすれば、八月浪の間や小貝にまじる萩の塵Vの次に位置すべきであるが、これは本文に採った句と、素材が同一だから、重複を避けた。

八月衣着てVは、西行法師を慕う心がふくまれている。これもますほの小貝と素材的に同一であるから削らねばならなかつた。

胡蝶にもならで秋ふる菜虫哉

(己が光)

芭蕉の紀行文制作意識にふれて

こもり居て木の実卯のみひろはゞや(旅の後の)

△胡蝶にも▽の句には、如行の書いた「元禄二年はじめの夏、深川のいほりも人にやりて、なす野の原の郭公をまち、蓬・葎の敷寝の下に、きりくすを聞(き)て、千百余里の嶮難、終にかうべをしろうして、みのの国我さとにうつり給。句どもあまた有。此事はおくのしほりにのこし給へば、大形はもらしつ」という前文があるが、芭蕉の長途の旅の終りの感慨を客観的に代弁している文である。

△こもり居て▽も「怨水子別墅にて即興」とあり、△胡蝶とも▽の句とともに、怨水子の別墅に、旅の疲れを休めた時のしみじみとした感じのあふれた作である。

「ほそ道」の最後の本文は、「露通も此みなとまで出むかひて、みのの国へと伴ふ。駒にたすけられて大垣の庄に入(れ)ば、曾良も伊勢より来(た)り合(ひ)、越人も馬をとばせて、如行が家に入(り)集る。前川子・荊口父子、其外したしき人々日夜とぶらひて、蘇生のものにあふがごとく、且悦び、且いたはる」とあり、蕉門、師弟の愛情の深さが、「日夜とぶらひて蘇生のものにあふごとく」云々の文に生き生きと活写されている。

「ほそ道」結尾の句は、「翁此所より伊勢へうつり給(ふ)時、我舟にて送り侍るに」と書いた、大垣の舟問屋、谷木因と巻いた両吟歌仙の発句、△蛤のふた見に別れ行(く) 秋ぞ▽の作である。これが△行(く) 春や鳥啼き魚の目は泪▽と、行く春、行く秋で首尾照応、ながい「ほそ道」の文を結んでいることは上述したところである。

伊勢に旅立つまでの大垣潜在中の作は、△蛤のふたみに▽の作より以前にも、木因亭での△かくれ家や月と菊とに田三友▽(笈日) 斜嶺亭での△其まよ月もたのまじ伊吹山▽(真蹟) △はやくさげ九日も近し菊の花▽(真蹟) などの六句が、芭蕉集(古典俳文学大系集英社刊) に収載されているが、紀行の本文と直接関係がないので省略した。

主たる参考文献。芭蕉集。(古典俳文学大系集英社刊) 校本芭蕉全集(連句篇)。(紀行日記篇・俳文篇)。芭蕉伝記考説(阿部正美著。明治書院刊)。芭蕉文集・芭蕉句集(岩波古典文学大系)。おくのほそ道(附曾良随行日記。岩波文庫本)等。